

昭和肥料ニュース

FAX版



Vol. 056

石灰資材は土壌の酸度矯正に使用され、投入量に比例し土壌をアルカリ性に近づけます（pH数字が大きくなる）。ところが石灰資材による酸度矯正が思いのほか進まない場合もあるようです。今月号ではpH矯正する際に覚えておくべき石灰資材の使い方についてご紹介します。

前もって。土を見て。同時施用物に気を付けて。

- 施用後～作付け前までに待機期間を設ける（計画的な土づくりを行う）。
 - ・石灰資材を施用すると土壌中で様々な化学反応が起こり、作物が生きにくい状態になります。反応が落ち着くのに2週間～2ヶ月ほどかかります。（通常20日以上、施設園芸作物や、直播作物はさらに長期間の待機期間が必要です）
 - ★散布後すぐの作付けを行うならば貝化石が最適資材です。比較的障害が起こりにくいです（生石灰、消石灰は散布後即作付けに不向き）
- 土の保肥力の大小に合わせて、適切な施用量を与えるようにする。
 - ・粘土や腐植が多い土は基準量より多めに使わないとpHが上がりにくい。
 - ・砂質の土は少なめ施用でもpHが上がりやすい。
 - ★保肥力の小さい圃場ではpHが上がりやすい一方、持続性が低いので、ジックリ長持ちする資材が特に好適です。
- 同時施用する資材との相性にも注意する。
 - ・酸性肥料※との混用施用は避ける。（※硫安、塩安、硝安、過リン酸石灰など）
 - ・未熟有機物との併用は一時的にpHが乱高下するので十分気をつける。（有機物腐熟の際に有機酸、炭酸ガスが発生して酸度矯正力が相殺される。アンモニア発生で一時的にpHが急上昇し、その後急降下する。 など要注意）
- 一度の大量施用は副作用に注意する。
 - ・土壌の硬化、排水性の悪化、土壌微生物のバランス悪化、各微量要素欠乏症の発生などに注意が必要です。
 - ★有機物と併用し十分な待機期間をとるか、数年かけて矯正する。
- 施用後は適度な水分がある状態が望ましい。

作物はpHに敏感です

育苗後に本圃定植する作物では育苗培土のpHと、本圃土壌のpHに大きな違いがあると生育が乱れることが知られています。

このように作物の生育においてpHの変化は「異常事態」であり「トラブルの元」になります。長効きする資材（左）の使用や、在圃期間が長い作物ならば石灰資材の適期・適量の追肥をおすすめします。

【貝燐丸】

pH矯正力が長く続く「貝化石系肥料」です。作期が長い作物栽培や、根張りの改善が必要な際に有効です。施設作物や根菜類への使用にオススメです

